庭園 協会ニュース 第75号

一般社団法人 日本庭園協会
東京都新宿区西早稲田 1-6-3 福田ビル 301
〒169-0051　TEL：03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail：gsj20@m7.dion.ne.jp　URL：http://nitteikyou.org/
編集者：広報委員長・柴田 正文
委員・小沼 康子、加藤 精一、内田 均
題　字：故・上原 敬二
発行日：平成 26 年 1 月 31 日

技塾の初日、研修現場にて

先人たちの技と知恵を学び繋ぐ修行道場

東京農業大学短期大学部教授　内田 均

平成25年度の伝統庭園技塾が開催されました。

この技塾は、１９７９年に、当時の岩城亘太郎理事長の「次代を背負う若手へ、伝統庭園技術の継承・日本庭園の啓蒙をしなければならない」との意気込みで始まりました。その５回目に塾生として私も参加しました。「自分の人格以上の庭は造れない。技即ち人格である」との教えは今でも耳に焼き付いています。その自分が29年後、27回目の技塾のスタッフの一員となろうとは…。

今回は、宮城県支部主体で「東日本大震災復興記念庭園築庭」と題し、宮城県黒川郡大和町の大義山覚照寺境内に5年かけて、自然林や田園跡地の約４０００平方メートルに、北側の山を借景とし、沢水を利用して滝や枯山水・四阿・園路などの回遊式庭園を造ることとなりました。その主旨は次の通りです。

東北を代表する毛越寺庭園は、当時の権力者のための庭です。私たちは、東日本大震災復興の祈りを込めて、日本一のスタッフ・プロの集団で、庶民のための安らぎの庭を造ります。完成したら被災者に訪れてもらい、心を和ませていただきたいと思います。「毛越寺の庭行ったか、覚照寺の庭見たか。これを見なければ庭は語れない」と言われるような庭にしたい。また、その庭を末永く育て守ることも修行の一環であると考えます。

今後も毎年4泊5日で行う予定の技塾では、それぞれの研修年数に応じた伝統技法の基礎を学べるプログラムを用意します。修行道場として活用いただきたい。

この庭園の完成時は、当協会の設立百周年の年となります。その記念になるような庭にしたい。

私も、日本庭園に携わる者として、当協会の会員として、この庭園を通して、若い会員の育成と伝統文化の継承に役立つことができれば、とても嬉しいことであると思っています。

東日本大震災復興記念庭園築庭に、一人でも多くの参加を求めます。

（理事）

支部だより⑯ 今は2名だけの支部ですが頑張っています

石亀 靖

鳥取県支部は、雪松造園（県東部）と石亀芳樹園（県中部）の2名で活動しています。

2名とも造園関連団体である鳥取県造園建設業協会と日本造園組合連合会にも所属しており、技術研鑽を求めて共に独自の視点で研修を行っています。

特に雪松造園の後継者は岡崎にお

石亀芳樹園作品

雪松造園作品

ける石彫刻の修行を終えて帰鳥し、ますますオリジナリティ溢れる造園を体現されています。平成25年に第30回都市緑化フェアが鳥取市内で開催されました。テーマは「鳥取流緑化スタイル」で、ポール・スミザー氏監修のもと、当地に自生する植物を中心に植栽したナチュラルガーデンをメインとする従来型イベントと一線を画したフェアとなりました。2名ともそれぞれのメッセージを込めた庭園を出品しました。今後は会員を増やして庭を創る喜びを広めていきたいと思っています。

（評議員　鳥取県支部長）

心優しく石に熱い小倉茂さんを偲ぶ

名誉会長　龍居 竹之介

平成25年10月19日、小倉庭石店の主（あるじ）、小倉茂さんが85歳で亡くなった。もうあの優しい顔が見られない、口をとんがらせて石を語り石造品を論じたあの顔がもう見られないなんて情けなくて淋しくて…。

思いは昭和23年の昔に飛ぶ。早稲田の私の家で何となくお茶の稽古が始まった年だ。

師匠は東京農大におられ三越本店の美術部にも関係されていた市川（後に柳沢）信隆先生。表千家の茶を修められ宗淵の茶名を持たれた博識の方である。

私と私の小学校の友人が最年少で、そのすぐ上が小倉さんたち3人ほどの農大生、年かさに加勢俊雄（加勢造園）さんたち。全員で7名ほどの小じんまりした顔ぶれで実に楽しかった。この当時から小倉さんの石への思いは強かったように思う。父君・磯田準一郎さんの親友であり、特異な庭石商であった山岸宇一さんに私淑していたのが戦時中だったというのだから、当然とはいうものの石の話になると目が輝き、知識を増やそうという意気込みがよく感じられた。

それでも凄いのは古い石造品の勉強と同時に、現代の石造品のありようをいつも頭に描いていたことだ。商売だから当然といえばそれまでだが、燈籠の創作に打ち込んでいる姿には「やるなア」と感心させられた。最も「売るのは難しいものです」などというときは、もういつもの穏やかで優しい小倉さんに戻っていた。しかしこうした努力が、宮内庁から依頼の創作燈籠を父君と設計・施工し、皇居新宮殿に納めるという名誉に繋がったのであった。

昭和６３年の青年会講座で石造美術の商品価値について講義する小倉茂さん

わが協会が休眠法人として処分されそうになって、あわてて有力な会長探しに大奔走したのは小倉さんと父君であり、紆余曲折の末、宇野宗佑氏を口説き落としたのが、結果的には今日の新法人移行の成功の原点でもある。

いま眼を閉じると詰襟の学生服姿で、宗淵先生とお茶そっちのけで喋りあっている小倉さんの、真剣な顔が浮んでならない。さようなら小倉さん。

新年のご挨拶

金子 直作

新年明けましておめでとうございます。

昨年は、新政権のもと実施された経済政策もあり、経済全般にわたって回復の兆しが見られ、富士山の世界文化遺産登録や２０２０年夏季の東京オリンピック・パラリンピック開催の決定などにより、将来への期待がもたらされた一年でした。一方で、豪雨や竜巻などの自然の猛威に日本各地が襲われた年でもありました。また、東日本大震災の爪痕は依然として消し去られておらず、復興も道半ばのようで、以前の生活を取り戻せていない被災者の方が多くおられます。本年はさらに復興が進展することをお祈り申し上げる次第です。

さて、当協会は昨年9月20日に一般社団法人の認可をいただき、本年1月6日に一般社団法人日本庭園協会として登記いたしました。大正7年に「庭園協会」として創立されて以来、大正15年に「日本庭園協会」となり、昭和12年には厚生省認可の「社団法人日本庭園協会」となり、昭和53年の日本造園士会との合併を経てこの度「一般社団法人」となりました。法人化移行に際しては多くの方々のご尽力により無事移行できたことに感謝いたしております。

日比谷図書文化館
大ホール壇上の
金子直作会長

今年度は、昨年より宮城県支部を中心に5ケ年計画で開始されました、「東日本大震災復興記念庭園」の築庭をはじめ、継続事業となっております「庭園技術連続基礎講座」、「機関紙の発行」、「庭園協会賞」、「国際活動による交流」や「鑑賞会の講演会や見学会」等の本部活動と各支部の活動を円滑に連携した事業を進めていただきたいと存じます。

また、このような様々な活動を行うためには、会の事業費の確保が重要となります。その財源となる会費の納入と、更なる会の発展のために会員増大を図りたいと存じます。協会としても広報活動を促進してまいりますが、会員の皆様もお知り合い、周りの方等にも声をかけていただければありがたいと思いますので、是非ご協力をお願いいたします。

（会長）

創立95周年記念シンポジウム『日本庭園の未来を語る』開催

高橋 康夫

都立清澄庭園は90年前の大正12年に本協会創立5周年と会員１０００名達成を祝う式典会場でした。１００周年を迎える5年後に会員数１０００名越えを目指すという思いを込めて今回の会場に致しました。

金子直作会長の開会の挨拶に続き第一部は龍居竹之介名誉会長による「日本庭園協会の95年を振り返る」と題した基調講演会、「庭園は変化するもの、協会は日本の庭園文化を担う役割があり、今後もさらに発展することを期待する」というお話を頂きました。第二部は5名によるパネルディスカッション、パネラーは龍居名誉会長、青木美樹子副会長、梶原ちとせ東京都東部公園緑地事務所維持係長、中山なつ希（公財）東京都公園協会文化財庭園係長、小沼康子評議員でコーディネーターは高橋が担当しました。シンポジウムの主題は「日本庭園の未来を語る」で、庭園との関わり方を各パネラーから発言、その後庭園が抱えている課題についてそれぞれの立場から発言して頂き、これからの庭園の未来について語って頂きました（詳細は機関誌「庭園」10号に掲載予定）。その後、北村均、角田彰両会員に清澄庭園内を案内して頂き記念シンポジウムを終了しました。

（常務理事）

清澄庭園大正記念館で開会
の挨拶をする金子直作会長

基調講演をする
龍居竹之介名誉会長

シンポジウムに臨む女性パネラーの面々と
コーディネーターの高橋康夫常務理事

鑑賞会　秋季庭園見学会

諸戸氏庭園・六華苑・伊奈富神社庭園・北畠氏館跡庭園・城之越遺跡

高良　啓子

六華苑での集合写真

平成25年11月14日（木）～15日（金）、27名の参加者で三重路の旅に行ってきました。

初日は桑名駅に集合し、まず桑名市にある「諸戸氏庭園」を見学。実業家の初代諸戸清六が明治時代中期、江戸時代に山田彦左衛門が所有していた屋敷を改造したもので、邸宅は保存修理工事中でしたが、その様子を見学した後、菖蒲池を中心とした回遊式庭園を鑑賞しました。

次に隣接する「六華苑」へ。二代目清六が大正2年に建てたジョサイア・コンドル設計の塔屋が印象的な洋館と、連結して一列に建っている和館とを見学。各々違った趣のある建物でした。

次に鈴鹿市にある「伊奈冨（いのう）神社庭園」へ。鳥居をくぐり、本殿へと続く歴史を感じさせる長い参道に沿って日本最古の庭とも言われる、池を中心にした庭園がありました。自然湧水で「七島の池」と呼ばれ、静寂な時の流れの中にひっそりと七つの小島が並んだ、趣深い庭園でした。

2日目は小雨模様の中、まず津市にある「北畠氏館跡庭園」へ。北畠神社の神苑で、山深く静かな武将庭園です。１５３０年に、細川高国が作庭したと言われる池泉観賞式庭園で、「米字池」と呼ばれる池泉の周りには、今を見頃とグラデーションの紅葉が大変美しく色づき、築山を見すえると、その山裾に広がる枯山水は大変立派でした。「渦巻式石組」と呼ばれ、立石が中央に風格良く立ち、雨に濡れ苔むした石組と枯山水の庭が、落ち着いた風情を醸し出していました。そこに立って、紅葉に映える池泉の方を眺めると、一同から感嘆の声が上がりました。この庭園は平成12年～13年にかけて、龍居名誉会長の指導の下、修理・復元されたとのことです。その様子については、龍居名誉会長と共に、京都の曽根造園の方が説明・案内してくださいました。

修復整備中の諸戸氏庭園の護岸石組

雨も上がり、最後に伊賀市にある「城之越（じょのこし）遺跡」へ。平成3年に畑の中から古墳時代前期の大溝を中心に、祭祀が行われていたと言われる遺跡が見つかり、整備された所です。広々とした景色の中で、古代人が祈りを捧げたのだと、思いを馳せることが出来ました。

龍居名誉会長の説明と共に、見応えのある庭園や史跡を訪れることが出来て、大変有意義な見学会でした。無事に2日間の旅が終えられたことに感謝し、帰路に着きました。

（鑑賞会　正会員）

北畠氏館跡庭園の石組

平成二十五年度

支部活動報告

東京都支部／茨城県支部
宮城県支部／愛知県支部

東京都支部・本部共催講座 パネルディスカッション「これからの庭を楽しむ」開催

平成25年10月13日

熱き思いを語り合う　柴田 正文

創立95周年を迎える本協会の創立の原点を省みながら、さらなる日本の庭の発展を期するため、庭園業界を超え活発な意見交換を行い、新たな庭の可能性を見出し、確認し合いながら未来へつなげていくという目的のもと、初代理事長、本多静六先生ゆかりの日比谷公園内の日比谷図書文化館大ホールで開催されました。

パネラーには高水謙二氏（実業家）・中山章氏（建築家）・正木覚氏（環境デザイナー）・榊原八朗氏（ランドスケープ・アーキテクチャー）金綱重治氏（作庭家）の5名、コーディネーターは豊蔵均氏（編集者）でした。高水氏は「根底にあるのはテーマと調和と物語のある庭であり、使う材料はいずれ腐り土になる素材だけを使う」という発言。中山氏からは「21世紀は環境の時代だと言われていて一番チャンスが巡ってきている時に自分たちのターゲットが定まっていない」という叱咤があり、正木氏からは「ガーデニングブームを経て今、あらためて考えるのは、日本の風土を学び直した上で植物と人間の付き合い方を見ていく事と、細やかな日本人の物の見え方というのがある」。榊原氏は「自分はデザインの源泉は自然にあると思うが、自然の美しさが何なのか具体的、理論的に説明できなくてはいけないし日本人の曖昧さは外国では通用しない」という苦言。金綱氏からは「時代によって形も変化するが変わらないものもある。日本人の美意識を形成している自然観を考えながら、心に響く魂を揺さぶる庭づくりを目指していきたい」という発言がありました。（詳細は機関誌『庭園』10号に掲載予定）

（常務理事）

熱心に聞き入る会場の参加者達

茨城県支部・本部共催講座「向上庵庭園見学と古平貞夫会員作品見学」

平成25年10月19日・20日

茨城での共催講座報告　飛田 幸男

平成25年10月19・20日に本部との共催講座が開かれましたが、1日目の見学先である向上庵との関わりの発端となったのは平成22年に開催された第2回庭園技術連続基礎講座へ若い人たちに混じり参加した事でした。鎌倉で廣瀬慶寛講師による瑞泉寺庭園見学があり、夢窓疎石の作庭による岩盤を掘り削った池や徧界一覧亭へ向かう小道の山肌を削り、岩を見せる手法は素晴らしい発想のもとからできることと感じました。

30年ほど前、私が庭の志を持って独立したころ、よく筑波山系の麓に飛石や沓脱石などを探しに出かけた時に、そんな庭を見た記憶があり、向上庵を再度訪ねて住職に庭の勉強をしていることを告げると気さくに説明してくれ、お茶まで出してくれました。岩をくり抜いた池とは薄々知っていましたが対岸の鬱蒼とした草木の間から見える石組みまでも岩だと説明され、びっくりしました。そして室町時代の向上庵創建時（1342年）からの庭で、一般には公開していないが枝垂れ桜の開花時には花見客が多数来るとのことでした。（平成23年9月の台風で根元から折れた）そして平成22年12月に向上庵の庭園見学と住職の法話を聞きました。平成24年3月、岩肌に生えている樹木の強剪定を行い、8月、廣瀬常務理事に来て頂き住職に整備方針を説明して了解を得ました。9月8・9日の2日間延べ38人が泥だらけの奮闘の末、池底にノミで削ったような跡を発見し、岩をくり抜いた池と確認しました。下木などはほとんど撤去し、岩肌をよく見せるように苔も剥がしました。

このような造園手法を持つ作庭家は夢窓疎石の他に誰かいたのだろうか。夢窓疎石は常陸太田市にある正宗寺の開山（1341年）に来たという記録が残っているが果たしてこの庭の作者は誰だったのだろうか、夢はふくらむ。

どこまでが自然かどこからが人工か力強い岩組み

2日目は朝からあいにくの雨、つくば市役所前からバスに乗り藤原邸・富田邸・普門寺・桜井邸・筑波石販売店・石井邸と古平貞夫氏作庭の庭を見学しました。古平氏は平成20年度第7回日本庭園協会賞を受賞しています。普門寺ではまんじゅうをいただき石井邸では部屋に上がりお茶をいただきました。

茨城県の庭は偕楽園だけかと思っていたらこんなに古い庭があり、また古平氏のように高度な庭園技術を身に着けている人もいる。そして技能五輪では近年入賞者が続いていて「造園茨城」と自負したい。

（評議員　茨城県支部長）

つくばの庭園めぐり　藤原 尭子

秋の気配が漂いはじめた10月下旬、茨城県支部・本部共催講座に参加しました。あいにくの曇り空の中でしたが、つくばエクスプレス終点駅で出迎えを受け最初の見学先、翠厳山向上庵に向かいました。学園都市を抜け、色づいた実をつけた柿の木、瓦屋根の続く村落風景、すぐ近くに、ぼんやりと霞に包まれた筑波山、そんな中をドライブして目的地に着きました。この寺は暦応年間（1338年～1342年）に小田氏の第8代当主である小田治久が創建したと伝えられ、臨済宗中峯派に属していましたが、その後臨済宗建長寺派の寺院となり、天正年間（1573年～1592年）の戦火により堂宇を失ってしまったと伺いました。また平安時代の名高い歌人でその美貌でも知られる小野小町が旅の途中で病を得て、この地で力尽き生涯を終えたと伝えられ、小野地区には彼女の墓標とされる五輪塔が残されているそうです。

山を背負ったようなこの寺の参道には、釣船草、桜蓼など幾種類もの山野草が見られ、床の間には菊咲き秋明菊が花器におさまり、季節を感じさせてくれました。

和尚様はこの上なく植物を愛し、切ることが忍びなく、結果として木々が繁茂してしまい石組や池を覆い隠してしまったことや飛田幸男支部長や廣瀬慶寛氏の説得により庭園整備のための実生木の撤去や思い切った剪定、護岸のかん木類整理などの必要性を理解し、任せたとの事でした。裏山の岩盤の急斜面を利用しての石組みと岩盤を穿って作った池とからなっていて現在はもみじや雑木類が茂っていました。

長年にわたる土砂や落葉の堆積などで分からなかった全容が支部会員たちの整備作業を経て明らかにされて来たそうです。その姿は素朴でいて且つ凛としていました。地味な庭ですが私はここに何回でも立ち寄りたい気持ちになりました。

2日目は朝から雨。地元茨城の古平貞夫氏が作庭した庭のいくつかと現在も作庭中の庭を見せていただきました。石積みの見事さは勿論のこと、駐車場から母屋へ向かう途中に真っ赤な実をつけた石榴の木がのぞくような角度で植えられていたのが印象に残っています。庭造りの繊細さと大胆さを感じました。最後に伺ったお宅でのお抹茶とお菓子の味も暖かく、有意義な一日でした。ありがとうございました。

（鑑賞会　正会員）

桜井邸のダイナミックな石積み

宮城県支部・本部共催「伝統庭園義塾in仙台」

平成25年10月11日～15日

仙台で始まった庭園技塾　横山 英悦

第一期生を迎え5日間の伝統庭園技塾が宮城県大和町覚照寺境内で開催されました。宮城県支部が結成してわずか3ヶ月余りの短い準備期間で今回の大イベントがスタートしました。震災を乗り越え新たな気持ちを形として残したいという会員の熱意が「震災復興記念庭園」を築庭することになりました。

協会本部から全国に塾生の募集をしていただき西は石川県小松市、北は北海道をはじめ県内外から50名の塾生の参加をいただき盛大に行うこ

会場となった覚照寺の入口にて

とができました。参加いただいた研修生は初心者からベテランまでと年齢層は幅広く、期待していた以上の技塾となりました。今年度計画した整備エリアは文化保全ゾーンの園路整備（畳石）約60平方メートルとお堂周りの軒内の改修整備、墓石の修復でした。今回の実技研修は班ごとにノルマを持っていただき、それにチャレンジする事で実社会に出ても役に立てるようなカリキュラムとしました。研修第1日目は初めて体験する素材（安山岩系山石）の特性と施工コンセプト（草の手法）に戸惑いがみられましたが、2日目あたりからは徐々に理解していただき、最終日には畳石周りに地苔を張り初年度の研修が予定どおり完了しました。

打ち上げパーティーで塾生の感想を聞いたところ「日本庭園協会創立百

実習前に横山英悦講師の説明を受ける塾生達

お堂へ向かう階段部分での作業

周年記念」までの竣工をめざし、次年度の技塾にも必ず参加するという声が多く聞かれました。準備にあたった支部役員には何よりもうれしい言葉でした。

震災直前の2月に計画した「東北に名園を」という巨大プロジェクト。庭づくりに熱く燃える男たちが資材を提供し、ボランティアで日本庭園を造り、5年間伝統庭園技塾を開講し次世代に技術を伝承するという前例のない新たな試みです。関係各位のさらなる協力を賜り推し進めていきたいと思います。

（宮城県支部　正会員）

久々の技塾参加、また来年も来ます

桃井 雅彦

この度、宮城で行われた伝統庭園技塾ですが私自身、久々の技塾参加で、会場はどの様な所なのだろうか、どのような塾生、スタッフなのだろうかと色々と思いを巡らせながら現地に向かいました。入口を見ると大きく東日本大震災復興記念庭園」の看板。会場に入るとそこは冷厳なお寺で、話によると伊達家に所縁のあるお寺とのこと、さらに奥に進むと宮城県支部の方々がすでに会場整備に黙々と働いておられ、皆さんの今回の技塾に対する意気込みがひしひしと伝わってきて私も身の引き締まる思いでした。

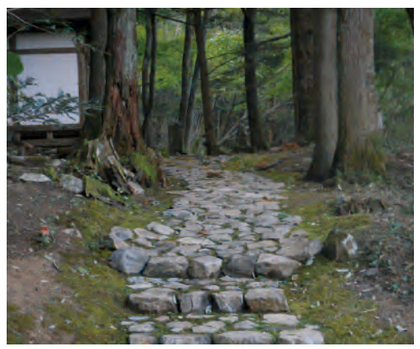
いよいよ実技研修が始まると延段整備は熊野古道のようなイメージとの事でしたが写真でしか熊野古道は見たことがなく戸惑いましたが、塾長の廣瀬慶寛氏、技術統括の横山英悦氏、小泉隆一氏にご指導いただき周りの若い塾生（私が今回の塾生の中では一番年長の様です）と意見を交わしながら延段を完成させていき、まるで昔からそこにあった様な景色となり大変感動しました。延段というものに3日間

チームごとに力を合わせて取り組んだ実習風景

集中して取り組んだことは大変勉強になりました。特別講義では内田均先生、高橋康夫先生から新たな発見や知識を得ることができ、最終日には吉田愛輝氏による高所剪定・伐採に用いるツリークライミングの実演指導がありロープワークを学ぶことができました。夜は皆さんと喧々諤々意見を交わし、人それぞれの物事の捉え方を学び有意義に過ごすことができました。

こうして、瞬く間に5日間が過ぎましたが、打ち上げ会に参加できず挨拶もそこそこに慌しく帰ることになり大変申し訳ありませんでした。この技塾は5年計画との事ですので来年も是非参加させていただきたいと思っています。

（北海道南支部　正会員）


熊野古道の趣がただよう完成した園路の景観

愛知県支部講演会「日本庭園のコンセプトとデザイン」

平成25年11月17日

愛知県支部の立ち位置をふりかえって

高見 紀雄

本年度、愛知県支部では地元に本協会の存在を幅広く知っていただこうと、愛知県内の造園会社従業員、独立間もない若い造園家を主な対象とした企画を遂行いたしました。

題して「庭園技術講座２０１３」。年5回の内容は、庭園図面パース講座の1～2回で実際の図面を作成し、3回～4回で石積み、植栽講座を行いながらモデルガーデンを受講生で制作しました。場所と石材などを提供していただいた庭園資材会社の株式会社おしゃ楽のご協力なくしては実現できませんでした。地域の庭園業界の啓蒙活動に、今後とも我が支部と共にタッグを組んで行きたいと思います。

そして本講座5回目となったのが平成25年11月17日、野村勘治氏を招いての「名古屋城二の丸庭園の解説と講演会」でした。秋深まる名古屋城には各地から30名の参加者

野村勘治講師の説明に聞き入る

が集い、観光客で賑わう中を見学していきました。特に二の丸庭園は三の丸が陸軍の駐屯場であった戦時中でも奇跡的に壊されずほぼ当時のまま姿で存在しており、当時、大名庭園が中国の影響を受けていた事を証明する貴重な庭園です。古庭園を見学していてもその歴史や時代背景を知らずに漠然と見るのではなく、野村先生曰く「日本庭園には作庭家のコンセプトや物語になぞらえたものが多く、見るのではなく、意図を読むものだよ」確かに己の知識や興味があれば、庭の見え方が変わるのだと思います。

ゲスト穴太衆の柿阪大介氏には、名古屋城の石垣についての質問に答えていただきました。安土時代から城積みを代々語り継がれている歴史でしょうか。石の表面ではなく裏側の出来の良し悪しを的確に指摘していただきました。

午後からは、名古屋能楽堂にて野村先生に「日本庭園のコンセプトとデザイン」をテーマに講演していただきました。天龍寺、桂離宮、龍安寺など先生ならではの豊富な資料を見ながら「龍安寺の石の配置は単純に竜を象っただけですよ。上から見れば一目瞭然でしょう。この石が竜の頭ですよ」などストーリーを交え解説をしていただきました。中でも先生がまだ若いころ、師匠でもある重森三玲氏から「作庭の図面を設計するのではなく、お施主の意図を設計することが仕事

午後からは講義に耳を傾ける

である」と教えられたというエピソードは特に印象に残りました。また後半は、現在施工中のリッツカールトンホテル京都の作庭風景写真も見せていただきました。小堀遠州、重森三玲ほか話し出せば止まらないところを時間に気を使いながら3時間あまり、あっという間の講演でした。忙しい時期にもかかわらず貴重な時間を割いていただき感謝し、また近い将来の講演をお願いしました。

定期講座ではない中での累計１００名以上の受講生の方々、誠にありがとうございました。支部長として愛知県支部の立ち位置の確認、方向性が少なからず指し示せた一年となりました。

（評議員　愛知県支部長）

野村勘治講師を囲んだ参加者達